

資料

子育て・教育・地域支援フィールド開拓のための地域臨床実践（第1報）

ー A 発達支援センターにおける母親支援の実践を中心としてー

川端 愛子・北川 聡子*・古家 好恵*・後藤 守

(2011年1月14日受稿)

抄録： 本研究は、北海道文教大学子育て教育地域支援センターの活動の一環として進めている出向型支援活動をベースとしている。この活動は、地域の子育てに関連する施設と連携をとりながら、学生のために高度な保育・教育臨床実践のフィールドを提供していくところに特徴がある。本研究は、その第一報として、このフィールドを開拓するための実践的研究について報告する。ここでは、①支援を必要とする子どもの母親、施設職員、及びわれわれ大学スタッフの三者のコラボレーションによる発達支援スタイルの構築、②「ミュージック・リフレッシュ活動」を通じたミュージックセラピーの実践、③「ミュージック・リフレッシュ活動」に関するイメージ調査および新しい反応収集提示装置による振り返りを通じた母親の「自己・他者受容力」の向上のための支援、の3点から考察した。

はじめに

われわれは、発達に課題のある子どもたちに対する集団指導法として開発された「関係力育成プログラム」について、実践と研究を進めてきている（後藤他2010）。ここでは、「刺激の受け手としての環境」を重視した指導者のあり方が重視されている。子どもの自発的な表出行動に対し、受容的、肯定的に受け止めて応答する環境側の柔軟な場作りが主軸となる指導法である。その意味で非指示的なカウンセリングの世界と通底すると捉えられる。関係力育成プログラムでは、この他、時間の構造化としてのBGMの導入、場の構造化としての舞台の設置、チーフティーチャー、サブティーチャー、アシスタントティーチャーの3者からなる指導者の構成などを通して、構造化された場の構成に関する工夫がなされている。関係力育成プログラムの詳細については、後藤他（2011）を参照されたい。

そして、このような「関係力育成プログラム」の理論を基に、新たな取組として、子どもの

発達基盤としての母親の心の安定化を支援する「ミュージック・リフレッシュ活動プログラム」の開発について、実践と研究を進めている（川端他2008、川端他2009、川端他2010）。この活動は、発達に課題のある子どもへの支援について考える時、子どもの発達基盤の一翼を担う母親に着目し、母親の自己・他者肯定感とQOLを高めるためのグループでの新しいミュージックセラピー実践である。

北海道文教大学子育て教育地域支援センター（通称、文教ペンギンルーム）では、出向型支援活動を通して、地域の関連施設と連携を取りながらフィールド開拓を進めている。そこでは、この支援活動の流れの中に、学生が参画し、地域で暮らす日常の子どもや母親と接することにより、教育・臨床実践に関する力量を身につけていくことを目指している。本実践報告は、このフィールド開拓の一環として、A発達支援センターにおいて実施している母親グループを対象とした「ミュージック・リフレッシュ活動」の実践とその成果に

ついて検討することとする。

I. 支援を必要とする子どもの母親、施設職員、及びわれわれ大学スタッフの三者のコラボレーションによる発達支援スタイルの構築

1. 母親グループと共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」

(1) 母親グループと共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」のねらい

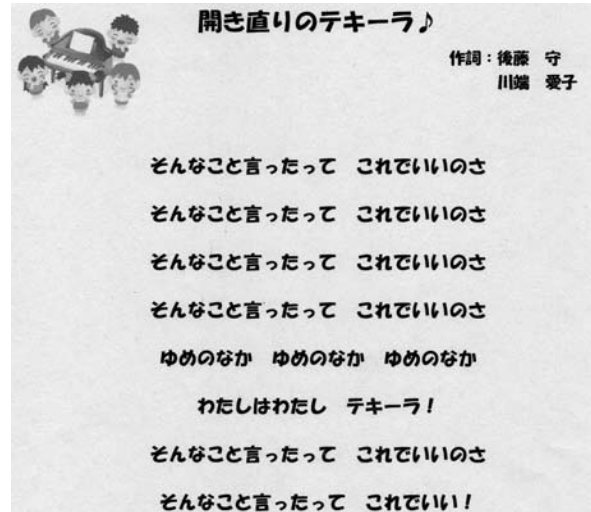
われわれが新しい試みとして進めている、『母親グループとセラピストが共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」』は、子どもを支える発達基盤としての母親が自ら、心の安定化を図り、QOLを高めていくことを支援する、グループでのミュージックセラピー実践である。活動の目的は、母親の「自己・他者受容力」を向上させることである。グループで行うことは、自己・他者を受容すること、他者に受容された自己を受け入れていくこと、そしてこのグループが共に実践した成果を発表することを通して、グループ以外の人々にも受け入れられていると感じ取っていく上で重要である。これらのことを通して、子どもや自分を取り巻く環境との良好な関係性の構築を支援できると考えている。

そして、この取り組みのコンセプトは、セラピストが、子どもを支えるキーパーソンとしての母親と協働し、施設職員と連携しながら、子どもを支援していくところにある。発達に課題のある子どもに対する支援について、子どもの母親、施設職員、センタースタッフの3者が協働したコラボレーションによる発達支援スタイルの構築に取り組んでいる。

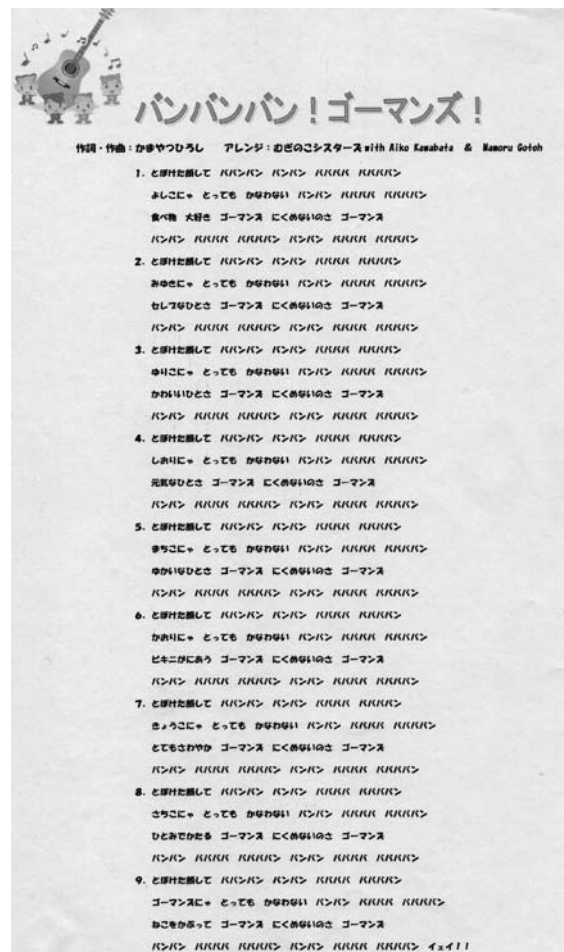
(2) 曲の選定及び歌詞のアレンジ

母親グループとセラピストが共に、曲の選定および歌詞のアレンジに取り組み、「開き直りのテキーラ（資料1）」「バンバンバン！ゴーマンズ！（資料2）」を創作した。資料1及び資料2は、選定した曲に歌詞のアレンジを加えたものの内容の

一部を示している。これらの創作した曲を、母親グループとセラピストが共に、セラピストのピアノ伴奏にあわせて歌いながら、シェイカーなどの楽器でリズムをとって体を動かした。



資料1 「開き直りのテキーラ」の歌詞カード



資料2 「バンバンバン！ゴーマンズ！」の歌詞カードの一部

Ⅱ. 「ミュージック・リフレッシュ活動」に関するイメージ調査

ここでは、このニュータイプの『母親グループと共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」』の実践の成果を検討するために、「ミュージック・リフレッシュ活動」に参加した体験のある母親（以

下、体験群）と、参加した経験のない母親（以下、未体験群）を対象に、「ミュージック・リフレッシュ活動」の実践に対するイメージについて20項目からなるSD法形式のアンケート調査を実施している。表1はSD法形式によるアンケート調査票の内訳である。

表1. 「ミュージック・リフレッシュ活動」に対するイメージについてのアンケート調査票

①	明るい	どちらでもない	くらい
②	むずかしい	どちらでもない	やさしい
③	たのしい	どちらでもない	かなしい
④	おもしろい	どちらでもない	つまらない
⑤	ユーモラスな	どちらでもない	きまじめな
⑥	にぎやかな	どちらでもない	おとなしい
⑦	やわらかい	どちらでもない	かたい
⑧	おだやかな	どちらでもない	はげしい
⑨	ようきな	どちらでもない	いんきな
⑩	おちついた	どちらでもない	おちつきのない
⑪	かいほう的な	どちらでもない	へいさ的な
⑫	はでな	どちらでもない	じみな
⑬	ういた	どちらでもない	しずんだ
⑭	つよい	どちらでもない	よわい
⑮	かるやかな	どちらでもない	おもおもしろい
⑯	あたたかい	どちらでもない	つめたい
⑰	ゆったりした	どちらでもない	きゅうくつな
⑱	かんたんな	どちらでもない	ふくぎつな
⑲	こちよい	どちらでもない	ふかいな
⑳	一般的な	どちらでもない	個性的な

図1は、「ミュージック・リフレッシュ活動」に関する回答の結果をグラフ化したものである。なお、マイナスの係数の項目は、尺度項目を反転させてグラフ化した。実線のグラフは体験群プロフィールを示している。これを見ると、「軽やかなー重々しい」の形容詞対を除いて、いずれも、未体験群（点線のグラフ）のプロフィールよりも、左側の形容詞の記述方向にあることが明らかにされた。左側の形容詞は、どちらかと言えば、前向きで躍動感があることとあわせて、包容力のある形容詞群から構成されている。その意味では、未体験群と比較して、体験群の母親たちのほうが、この「ミュージック・リフレッシュ活動」に対し

て前向きで躍動感と包容力のある世界を感じていることがわかる。

このことは、体験群の母親たちの20項目の形容詞対の内訳を見るとより明らかにされる。20項目の形容詞対のうち、体験群の母親が高い割合（係数80以上）を示した項目は、明るい（100）、易しい（86）、楽しい（100）、面白い（100）、ユーモラスな（100）、にぎやかな（100）、柔らかい（86）、陽気な（100）、開放的な（100）、暖かい（86）、ゆったりした（86）、心地よい（100）、個性的な（86）、の13項目であった。また、割合は体験群を下回るが、未体験群の母親たちも同様のイメージを体験群の母親たちによる発表会を通して感じている

ことが、未体験群の母親たちのプロフィールから読み取ることができる。

一方、未体験群と比較して差異(10以上)が認められた項目を見てみると、易しい(体験群86、未体験群50)、柔らかい(86、38)、激しい(43、13)、落ち着いた(29、0)、開放的な(100、63)、派手な(57、38)、浮いた(43、13)、軽やかな(43、75)、暖かい(86、75)、ゆったりし

た(86、25)、心地よい(100、63)の11項目であった。これに対して、明るい(100、100)、楽しい(100、88)、面白い(100、88)、強い(43、50)の項目には差がなかった。これらの結果を通して見ると、体験群の母親たちの非常に特徴的なところとしては、「ミュージック・リフレッシュ活動」に対して、易しくて、柔らかく、ゆったりした、そして心地よい世界を感じていることが考えられる。

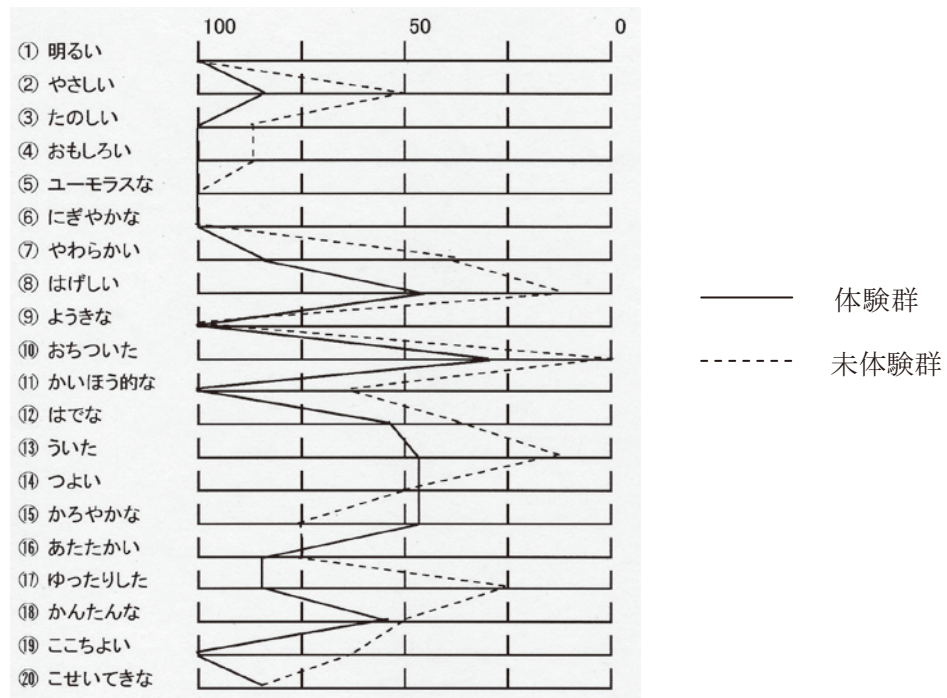


図1 「ミュージック・リフレッシュ活動」のイメージに関するアンケート調査の結果

図1の「ミュージック・リフレッシュ活動」に関するイメージ調査の回答結果からも明らかなように、体験群の方が未体験群よりも、「明るい」「易しい」「楽しい」「面白い」「ユーモラスな」「にぎやかな」「柔らかい」「陽気な」「開放的な」「暖かい」「ゆったりした」「心地よい」「個性的な」の13項目において、ポジティブな方向に高い割合を示していることから、セラピストと母親グループが共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」には、これらの項目の形容詞が醸し出すイメージが内包されていることが推察された。写真資料1及び写真資料2は発表会の様子を写したものであるが、いずれの母親にも活力に満ちた躍動感が感

じられ、その場を共有していた参加者もパワーを与えられた印象が強い。これらの成果の背景には以下の要因が有機的に関連しているように思われる。

- (1) チーフセラピスト(川端)及びサブセラピスト(後藤)が、これまでの取り組んできた行動空間療法の考えを踏襲して、ミュージックセラピーの場の構造化を大切にした「ミュージック・リフレッシュ活動」を進めてきたこと。
- (2) 体験群の母親とセラピストが協働で曲の創作活動を通して、時間と空間(場)を共有できたこと。

- (3) 創作した曲「開き直りのテキーラ」の歌詞が「現在の自分のままでいいこと」を示唆しており、実際の「ミュージック・リフレッシュ活動」を通して、参加している他の母親たち及びセラピストと確認し合えたことで、自己肯定感をさらに高める機会が提供されたこと。
- (4) 「バンバンバン！ゴーマンズ！」において、母親グループとセラピストが協働で取り組んだ歌詞の作成・アレンジの取組が母親グループの自己受容力をさらに高めることに貢献したように思われること。歌詞は「ミュージック・リフレッシュ活動」の参加者全員の個別的な歌詞が織り込まれている。この曲（かまやつひろし作詞作曲）の軽快なメロディとあわせて、参加者全員の個別的な歌詞が織り込まれていることから、グループで一緒にこの歌を歌うことによって、一体感が醸造されている。自己肯定感の高まりとあわせて参加している他の母親たちにも共感できる環境が提供され、そのことが自己・他者受容力の高まりを作り出しているように思われる。
- (5) この取組がA発達支援センターの支援カリキュラム全体とも有機的に関係し合い、相乗的な効果を上げたことが考えられる。

以上述べたことは、発達に課題のある子どもの保護者全体への支援として位置づけられるが、特に、(1)～(4)は、直接、この実践の成果に反

映しているように思われる。このことは、「未体験群」の母親たちのイメージ調査の結果からも読み取ることができる。未体験群と比較して、差異(10以上)が認められた項目は、易しい(体験群86、未体験群50)、柔らかい(86、38)、激しい(43、13)、派手な(57、38)、浮いた(43、13)、軽やかな(43、75)、暖かい(86、75)、ゆったりした(86、25)、心地よい(100、63)の9項目であった。これを見ると、「軽やかな」のイメージ項目を除いて、一様に、体験群の方がポジティブな方向に高い割合を示している。特に、易しい(差異36)、柔らかい(差異48)、ゆったりした(差異61)、心地よい(差異37)などのイメージにおいて特徴的な差異が認められている。このイメージは「ミュージック・リフレッシュ活動」の参加経験の有無が影響していると考えられる。その意味では、これらのイメージの中にこの「ミュージック・リフレッシュ活動」の重要な部分が内包されているように思われる。

Ⅲ. 新しい反応収集提示装置 (PF-NOTEプロトタイプ) による振り返りを通じた母親の「自己・他者受容力」の向上のための支援

1. 新しい反応収集提示装置 (PF-NOTEプロトタイプ) による振り返り

本実践では、ミュージック・リフレッシュ活動が目指す、「自己・他者受容力」の向上をより効



写真資料1 「ミュージック・リフレッシュ活動」実践発表会の様子

果的に図っていくために、母親に、自分たちの実践場面を録画したビデオ映像を個別に視聴させ、PF-NOTEプロトタイプ(中島,2008)を活用して、自分たちの活動の「いい場面」に着目させ、実践場面の肯定的側面を中心に振り返らせている。PF-NOTEプロトタイプは、ビデオ映像を視聴しながらリモコンのボタンを押してマーキングすることによって、その結果がグラフとなって可視化され、場面毎のグラフと映像が併せて一つの場面で確認できるシステムである。そして、可視化された結果を振り返らせる、母親が自分たち自身の実践の「いい場面」について振り返ることにより、自己受容力の可視化につながっていくと考えている。

この取組では、発達に課題のある子どもの母親を対象としたグループでのミュージックセラピー「ミュージック・リフレッシュ活動」の実践と、PF-NOTEプロトタイプを用いて母親自身に自分たちの実践を振り返らせることを通して、この活動の目的である自己・他者受容力の向上をより効果的に図ることを目的とする。

2. 実践の成果

ここでは、「ミュージック・リフレッシュ活動」の成果をA発達支援センターに通う発達に課題のある子どもの母親Aの事例を通して明らかにする。

(1) 可視化資料の作成

本実践では、母親たちが自分や他者を肯定的に

受容していくことを重視している「ミュージック・リフレッシュ活動」の療法的な意味から、研究対象者である母親Aに、自分たちの実践の様子を録画したビデオ映像について、PF-NOTEプロトタイプを用いて、「いい場面」と思うところでボタンを押させ、可視化資料を作成する。

(2) 可視化資料による半構造化面接

可視化資料から高い頻度でマーキングされた場面のところを3点抽出し、それらを再生しながら、どのような特徴からボタンを押したかについて半構造化面接を実施する。

(3) PF-NOTEプロトタイプのマーキング結果

図2は、母親AのPF-NOTEプロトタイプによるマーキング結果を示したグラフである。丸で囲んだ部分は、高い頻度でマーキングされた場面a、場面b、場面cを示している。

(4) 可視化資料による半構造化面接の結果

可視化された資料による半構造化面接の内容を逐語化し、場面a、場面b、場面cについて母親Aがボタンを押した判断理由について検討した。特に重要と思われる部分について、筆者が下線を入れている。

① 場面aについて：「モーニン」と「開き直りのテキーラ」の発表場面

母親A：最初が始まってって、あのときの自分を思い出して、画面を見ながら。周りも、緊張があったりして、そしてそれがさっきの画面で、ふわーっとうち抜けて、みんながふわーっとうち抜けた

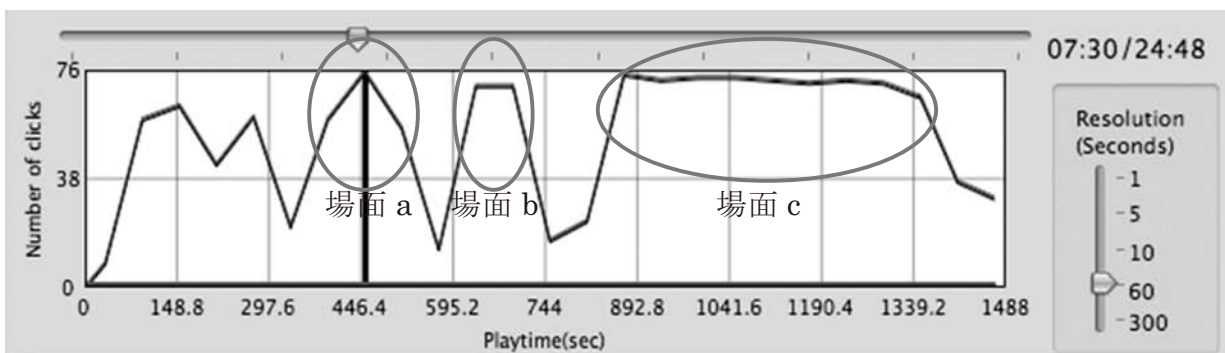


図2 母親Aによる可視化資料

ような気がしたのと一。最初のそんなそういう感じで押したんじゃないかなって。なんだか一つにふわーっとうふわっとなったような気がして。

面接者：そうですね。最初のね、ところの場面ですよね。その他に思ったところはありますか。

母親A：そうですね。あとは、この後の場面くらいからなんですけど、普段はなんかみんなそれぞれのところにおいて、特別一緒に活動、常に一緒にじゃないんだけど、ミュージックセラピーで、歌を通しながら、歌を歌ってなんか繋がってたんだとか、やっているときはあまり思っていなかったんだけど、後から振り返って見させてもらったら、歌を歌いながら繋がっているなっていうか、繋がってたんだとか、そういうのをちょっと感じて。

② 場面bについて：「恋のバカンス」の発表場面

母親A：練習してみんなでこれを成功させようと思って、一生懸命やったところだったので、うーん、なんともいえないですね（笑）。

面接者：そうですね。

母親A：みんなで、成功させようっていうのが、すごい、伝わりました。

面接者：はい。

③ 場面cについて：「バンバンバン！ゴーマンズ！」の発表場面

母親A：こんなゴーマンズなんですけど、でも周りの人たちも温かく見守ってくれて。ええ、やっぱり歌で一つになるってすごいですねなんか。ああ、なんかあーみんな一緒にいるんだなーってなんかつくづく思いました（笑）。はい。

面接者：なんか本当にすごい場面でしたね。

母親A：普段はそれぞれの場所でいろんなことやって、けどこうやって一つの機会に歌を歌っていることでこう繋がっていることが感じられる。そのときは、一生懸命必死に歌ってるんですけど（笑）。そのときはそんなことを感じているような間もないんですけど（笑）。後から見させて頂いて、ああ、一緒に繋がっていたんだなって改めて思いましたね。

面接者：普段はあまり一緒に活動するということは少ないですか。

母親A：子どもが大きくなってきてので、あの、だんだん回数は減ってきているんですけど、何かあるときには一緒になんでも。でもなんかこういう、おしゃべりじゃなくて歌でお互いにこう確認しあうっていうか。わかんないんですけど、うん。燃焼できるというか。繋がっているような感じが運動会で器械体操をやり終えたっていう感じ（笑）。なんかこうフォークダンスを踊ってほっとして、あ、楽しかったっていう感じです。

面接者：はい。ありがとうございました。

(5) 考察

場面aでは、母親Aは「みんながふわーっとう一つになった」と表現している。また、場面bでは、「みんなで成功させようと一生懸命やった」とまとめている。さらに、場面cでは、「こんなゴーマンズなんですけど、周りの人は温かく見守ってくれている」「やっぱり、歌で一つになるってすごいですね」と語っている。これらの語りからは、いずれも歌を媒介にしながら、お互いの存在を自覚し、こんな「ゴーマン」な自分を周りは受容してくれていると、振り返りの中で受け止めている母親Aの姿を捉えることができた。

謝辞

本実践報告は、北海道文教大学子育て教育地域支援センターの活動の一環としてまとめられたものです。本実践報告を進めるにあたって多くの方々のご理解と協力をいただきました。とりわけ、A発達支援センターの保護者の方々には新しい子育て支援のあり方について示唆に富むお話を聞かせて頂きました。また、本実践報告をまとめるにあたって、北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻の植木克美教授、東北大学大学院教育情報学研究部の渡部信一教授、中島 平准教授、熊井正之教授には多大なご指導を頂きました。ここに付記して、謝意を表します。

文献

- 1) 後藤 守、川端愛子：文教ペンギンルームにおける子育て支援のための関係力育成プログラム実践（第1報）、北海道文教大学研究紀要、(35)：127-140、2011.
- 2) 後藤 守、福原真理子、後藤恵美子、川端愛子、植木克美：BGMを導入した行動空間療法に関する研究（Ⅰ）－関係調整力に課題をもつ子ども達を視野に入れた指導法の開発－、コミュニケーション障害研究、(12)：17-30、2008.
- 3) 川端愛子、中島 平、熊井正之、植木克美、後藤 守、渡部信一：新しい反応収集提示装置を用いたミュージックセラピィの振り返り－障害児の母親Aの事例を対象として－、日本教育工学会第26回全国大会講演論文集：973-974、2010.
- 4) 川端愛子、北川聡子、古家好恵、植木克美、後藤 守：母親グループとセラピストが共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」－障害のある子どもを持つ母親に対するミュージックセラピィ実践の振り返りを通して－、日本音楽療法学会第9回学術大会発表論文集、128、2009.
- 5) 川端愛子、北川聡子、古家好恵、植木克美、後藤 守：発達面に課題をもつ子どもの母親に対するミュージックセラピィに関する研究（Ⅰ）－母親グループとセラピストが共に創る「ミュージック・リフレッシュ活動」を通して－、コミュニケーション障害研究、(13)：1-9、2009.
- 6) 川端愛子、北川聡子、古家好恵、植木克美、後藤 守：発達面に課題をもつ子どもの母親に対するミュージックセラピィに関する研究（Ⅱ）－ビデオ映像によるミュージックセラピィ実践の振り返りを通して－、コミュニケーション障害研究、(13)：11-17、2009.
- 7) 川端愛子、福原真理子、後藤恵美子、植木克美、後藤 守：BGMを導入した行動空間療法に関する研究（Ⅱ）－行動空間療法のBGM構成に関する音楽療法的視点からの考察－、コミュニケーション障害研究、(12)：31-44、2008.
- 8) 中島 平：レスポンスアナライザによるリアルタイムフィードバックと授業映像の統合による授業改善の支援、日本教育工学会論文誌、2 (2)：169-179、2008.

Community Clinical Practice for Pioneering a Child-Rearing, Education and Community Support Field (First report)

– Focusing on the Practice of Support for Mothers at Day Service Facilities for Handicapped Children –

KAWABATA Aiko, KITAGAWA Satoko, FURUYA Yoshie and GOTOH Mamoru

Abstract: This research is based on dispatched support activities, which are ongoing as part of the activities of the Child-rearing Education Community Support Center of Hokkaido Bunkyo University. The distinguishing feature of these activities is that a "field for high-level childcare/education clinical practice" is provided for students, while collaborating with community facilities relating to child-rearing. This research provides a first report on practical research to pioneer this field. The discussion here focuses on three points: ① Creating a development support approach based on collaboration between the mother of the child needing support, facility staff and our university's staff, ② Implementation of music therapy through "music refreshment activities," and ③ Support to improve "receptiveness of self and others" by mothers through investigation of the image of "music refreshment activities" and looking back based on a new feedback system.

